

■大会企画シンポジウム「南相馬をともに歩む」

今、福島の高校で何が起きているのか？

渡部 宏

(福島県 スクールカウンセラー)

私は福島県でスクールカウンセラーをしています。福島県の小中学校の中には津波による被害を受けたところもありました。今日は高等学校で何が起きているのか、主に3つのことをお話します。1つめは、相双地区という、福島県浜通りの中北部に位置する地域にある福島県立高等学校のサテライト校についてです。本校は震災後、授業ができない状態になり、いろいろな地域に分散したサテライト校という形で学校を再開しました。平成24年度に入ってから、分散しすぎては学校の運営が成り立たないということで、集約化されています。2つめに、相双地区に唯一あった私立高校が震災後に閉鎖され、生徒たちが福島市の姉妹校または転籍が許可された県立高校へ転校した状況をお話します。3つめは、震災によって家族の形態が変化したこと、「絆」だけでは解決できない問題についてです。

相双地区は、福島県内では相対的に、子どもの学力が低い地域です。親の教育への関心も、いわき地区などに比べると高くはありません。震災と原発事故を受け、もともと少なかった教員が避難したことで、平成24年4月には大幅に教員が不足する事態に陥りました。以前は、平成24年度は講師を採らないと（福島県の方針では）言っていたのですが、この事態に学校は慌てて講師を確保しなければならない状況になりました。

それまで学力が低い子どもの受入先となっていた私立高校が震災後に閉鎖されたことで、転

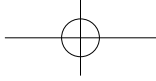
校制度を利用して避難したものの、転校先の学校と本人の学力とのギャップが生じて不適應につながるケースが出ています。

I サテライト校の生徒に起こっていること

転籍しなかった生徒たちは、「自分の学校を卒業したい」という気持ちから、サテライト校に通っています。家族は避難先において、生徒本人が家族と離れて寄宿舎生活を送りながら通学しています。寄宿舎とは言っても実際は旅館であり、一般の観光客なども寝泊まりしている場所です。週末に家族のもとへ帰省する子もいますが、部活などの関係で毎週帰省とはいかない子もいます。そうやって親元を離れた生活を旅館で送るうち、過呼吸や中にはけいれん発作などの身体症状を現わす生徒が出てきました。避難先から遠距離通学をしている生徒もいて、そうしたストレスによる頭痛や腹痛を訴える場合があります。サテライト校に通う生徒たちのストレスの状況を調査したところ、全体では61%がストレスを抱えているという結果でした。高校1年生では49%、2年生では60%、そして3年生では73%がそうした状態にありました。調査時点で3年生の子たちは、2年生のときに東日本大震災に遭遇して、環境の変化が大きかったことが影響していると考えられます。

II 津波と原発問題で転校した生徒に起きたこと

親元を離れ、単身で姉妹校に通っていた生徒



が、身体症状を呈して入院し、親元に戻ったためにまた転校となり学校になじめないケースがあります。この生徒は、津波にも遭遇しており、PTSDの様相も見られています。転校が多い子では4～5校にわたることもあり、学校生活に適応するまでに時間がかかります。

Ⅲ 震災と原発問題で変化した家族の形態

自宅から1年間、サテライト校に通っていたが、三学期に休みがちになり、病院を受診して精神疾患の診断がついたケースについてお話しします。その生徒は不登校の状態になっていましたが、両親にうまく自分の状況を伝えられなかったのではないかと感じました。父親は地元で仕事をしており、震災と原発事故を受けて従業員が離職する中、客の方も大幅に減少する事態に見舞われていました。いなくなった従業員の代わりに母親が引き受けることになり、母親自身の負担も増大します。子どもとしては自分の気持ちを親に伝えたくても、生活や仕事が大変な現状を考えると、両親に言えない。そうした事情があったのではと思います。

津波や原発事故による生活状況の変化は、子どもの心にも変化をもたらします。東京電力からの賠償金の方が、働いて得る収入よりも多いために、働く意欲を失う大人もいます。自分の子どもの心に変化があっても、そこに関心をもちたないというケースが出てきます。

(福島県の高校の)生徒の多くは、東日本大震災でいろいろな経験をしてきましたが、彼ら

には打たれ強さもあると感じています。将来の目標をもつことで、学校や生活に戻っていきま。課題としては、地域から人がいなくなってしまったので、絆を築きたくても築けないこと。あるいは、避難している人たちの多くが本当は戻りたいと思っけていても、原発事故の影響で戻りたくても戻れない。地元に戻ったとしても、住居や仕事のことなど、先の展望が見えないから戻れない。こういった状況があります。

私たちスクールカウンセラーとしては、支援したくても時間が足りません。平成23年度は福島県でスクールカウンセラーの加配が行われましたが、今年度はありません。でも本当は必要だと思っています。また福祉との連携も課題です。スクールソーシャルワーカーの配置が足りていませんし、相双地区はもともと精神科医療機関の空白地帯です。現在、稼働しているのは雲雀ヶ丘病院と、心療内科がある診療所の2か所です。今年になってようやく、NPO法人(相双に新しい精神科医療保健福祉システムをつくる会)がたちあげられましたが、まだ十分ではありません。個々に支援が入ってきても、それらが横につながらないことが問題です。私たちスクールカウンセラーもお互いの情報がつながっていない状態です。支援間をコーディネートするものが重要です。

人々が精神的な部分で安定するためには、生活の維持というところが大事で、つまりは心の拠り所を何に求めるのかが問われているのです。